陝西省岐山県鳳雛甲組建築西周晩期炎上説批判

部　　淳一

はじめに

西周時代の，宮殿や先祖を祀る宗廟にあたると思われる，大型建築のあとは，陝西省の岐山県鳳雛村，扶風県召陳村，長安県洛水村から馬王村にかけての一帯の3箇所で見つかっている[1]。

この論文は，そのうちの陝西省岐山県鳳雛村発見の甲組建築基址(基壇跡)[2]に建っていた建物(以下，鳳雛甲組建築と呼ぶ)が，炎上した年代について，定説化した西周時代晩期説[3]に異を唱え，西周時代中期を下らないことを論証するものである。

鳳雛甲組建築基址は，1976年に発掘調査された。西側に乙組の建築基址があり，南側にも建築基址がある[4]。一帯は，いわゆる周原である。実質的な周王家発祥の地である。

鳳雛甲組建築基址の概要は，その発掘簡報（以下，簡報と呼ぶ）によれば，次のようである。

平面形は，第1図のようであった。東西32.5m，南北45.2mと南北に長い長方形である[5]。

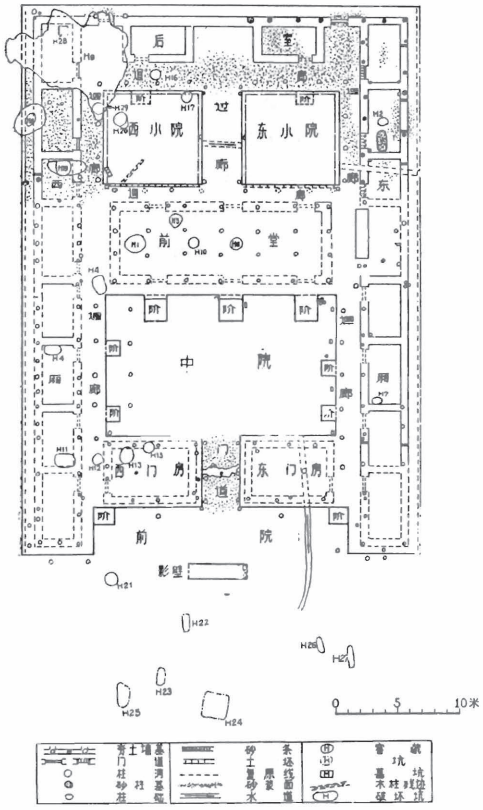
基壇は，平らにならした地面の上に，黄土を台状に版築してつくられていて，その厚さは約1.3mである[6]。

東西の小院と中院・門道の部分は，基壇を掘り窪めて作り出す。削らずに残した円字形に似た部分に，中央に前堂を，それを取り囲む形で，北に後室，東西に廂，南に門房の建物群を配し，そして，それらの建物をつなぐ廊をつくる，という具合になっている。

建物の壁は，木柱を芯に，土を版築してつくる。屋根は，垂木の上に葦を葺いた上に何層か麦藁を混ぜた泥を塗ってつくられ，棟と樋には瓦が使われていたらしい。鳳雛甲組建築基址の基壇を覆って，瓦と，葦・麦藁の圧痕のついた焼土塊があった[7]。簡報は，鳳雛甲組建築が炎上したとは，どこにも述べていない。しかし，この焼土塊の存在を始めとして，炎上したことを示す事実は，簡報中にいくつも看て取れる。

出土遺物は，後述する陶器・瓷器などの他，基壇に掘られていた2基の灰坑からの17275点もの大量の甲骨片（甲骨文が一部にあり，それによれば殷と西周の両方の時代のものがあるらしい）があった[8]。2基のうち，H11は，鳳雛甲組建築基址の調査時(1976年2月)[9]ではないが，簡報の発表の2年前（1977年7月－8月）に検出されたため[10]，第1図に見える。もう1基のH31は，簡報の発表間近（1979年5月）に検出された[11]ためであろう，第1図に見えない。

鳳雛甲組建築の炎上した年代を求める上で幸いなことに，鳳雛甲組建築が炎上した時にそこにあった品々が，焼け落ちた甲組建築の屋根と壁からなる焼土層に埋もれてのこっていた。その層は，



第1図

3B層と名付けられ，赤色焼土の層で，版築の泥壁，壁の表面，スサ混じりの泥のかけらが入っていた。厚さは4－11cmあった。3B層の下には，基壇との間に，赤灰褐色の灰の層があった。その中からは，陶鬲・瓷罍（下記の第2図の1，の陶鬲と5，の瓷罍ではないか）などが出土している。この灰層も3B層に含められているらしい。3B層の存在は，鳳雛甲組建築が炎上した後，焼け跡の片付けが行われなかったことを示す。4層は，建築の基壇である。3B層の上には，3A層があった。灰褐色で，多量の赤色焼土塊と少量の西周時代の瓦片が混じっていた[12]。

そこで，3B層の遺物の年代から，鳳雛甲組建築の炎上した年代を求めることができる。

そうやって鳳雛甲組建築の炎上年代を求めた研究は，すでに二つある。上述の鳳雛甲組建築基址の発掘簡報[13]と陳全方氏の論文[14]である。簡報は西周時代晩期説を唱え，陳氏論文は中期後半説を唱えている。簡報は，3B層の遺物の中に西周時代晩期のものがある（第2図2・8の2点）として，それを根拠に，鳳雛甲組建築が炎上した年代を，西周時代晩期としている。陳氏論文は，鳳雛甲組建築基址の出土遺物（3B層の遺物が中心にちがいない）のほとんどは，西周時代中期後半（原文は偏晩）のものだとして，鳳雛甲組建築の炎上した年代を西周時代中期後半としている。

3B層の遺物から炎上の年代を求める上で，上記の二つの研究には，それぞれ次のような看過せない問題点がある。

簡報では，3B層の遺物はどの年代のものが主体なのか，を確認することを怠っている。上記のような3B層に，上から鳳雛甲組建築が炎上した後の年代の遺物が混入することは，十分有り得る。したがって，鳳雛甲組建築の炎上年代を決めるには，3B層の遺物の多くがそうである年代を求めて，それに基づくべきである。

他方，陳氏論文では，簡報のような方法論上の問題点はないのであるが，3B層の遺物のほとんどが西周時代中期後半のものである，との具体的な裏付けのデータが，何ひとつ我々の前に示されていない。陳氏の意見の当否を検証しょうがない。

こうした先行する二つの研究の不備から，筆者は，3B層の遺物は，西周時代の早・中・晩のうちどの時期のものが主体なのか，をはっきりさせ，その結果をもとに，鳳雛甲組建築が炎上した年代を求め直してみた。その結果，先述のように，定説と異なって，鳳雛甲組建築が炎上したのは，西周時代の中期を下らないと思われる。そこで，この論文として，発表することにした。

なお，炎上に先立って鳳雛甲組建築が建てられた年代については，二説ある。簡報が，殷時代に遡るかも知れないという説を唱え，陳全方氏が，西周時代早期説を唱えている[15]。丁乙氏は，判然とはしないが，より新しく（西周時代晩期か）考えているらしい[16]。

簡報の説の根拠は，建築基址で見つかったH11の灰坑出土の先述の甲骨に，殷時代のものがあるらしいこと，同じく建築基址でみつかった炭化した木柱が，放射性炭素による年代測定の値（紀元前1095±90年）から，殷時代後期のものらしいことである。残念ながら殷時代後期設定のもとになる殷時代の終わりの年代は不明である。古文献の記事から推定が試みられているが，およそ紀元前12世紀末－11世紀末の幅で諸説入り乱れている[17]。

陳氏は，H11出土の甲骨文に文王の時期のものと考え得るものがあることから鳳雛甲組建築の建築年代の上限は文王の時期になるとしながら，西周時代早期説を唱えている。文王の死後，あとを継いだ武王の時期に西周時代が始まる。したがって，文王の時期は殷時代後期である。陳氏に誤解があるかもしれない。

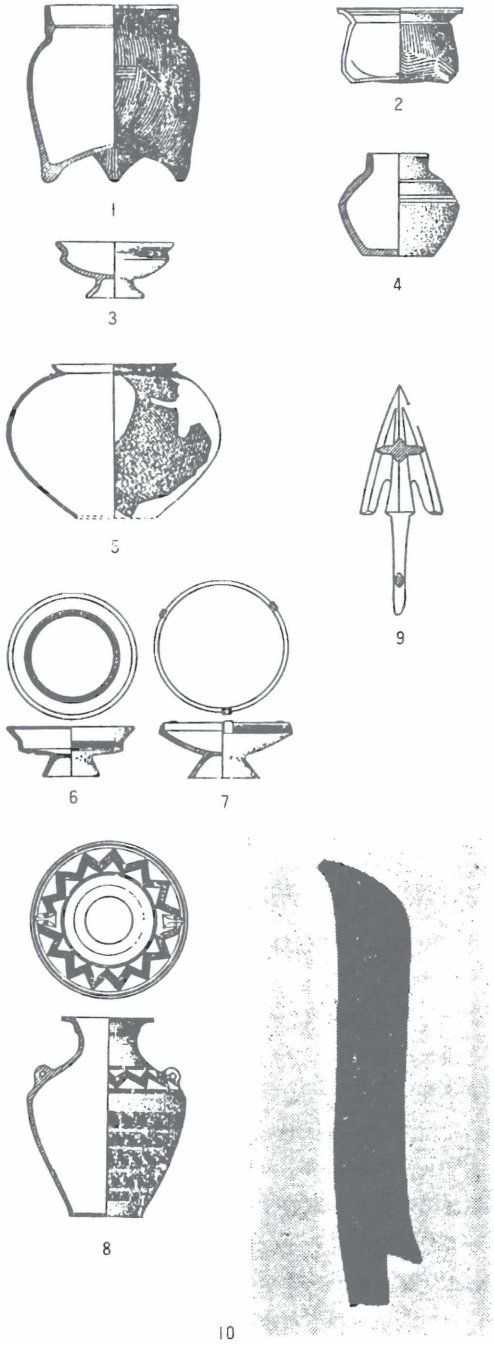
筆者は，灰坑出土の甲骨の年代は参考にしない方が良いと考えるが（「おわりに」参照），鳳雛甲組建築が建てられた年代については，簡報の説が今のところ妥当と思う。ただし，不動とは言いがたい。

3B層の遺物の年代

鳳雛甲組建築基址の3B層の遺物は，全部が公表されているわけでなはい。これまでに公表されているのは，簡報で公表された第2図のものが全てである。陶器（土器）4点，瓷器（施釉土器であろう）4点，銅鏃1点，玉削（小刀）1点の四種類計10点である[18]。焼土の層である3B層からの出土であるが，いずれも火や熱を受けた痕があるとの説明が見当たらない。痕がないのか，説明が落ちているのか，知りたいところである。

この10点の遺物の年代については，一部につい

て，下記のように簡報が説を出しているにとどまる。四種類の遺物の編年研究の現状は，玉削を除く陶器，瓷器，銅鏃については，ある程度の編年の研究がある[19]。しかし，この論文では，それらに，ほとんど拠らない。それは，そうした研究の編年結果からは，残念ながら第2図の遺物の年代



第2図

が引き出せないためである。

そこで，3B層の遺物の年代を求めるのに，上記四種類の遺物の編年の拠りどころとなっている西周時代青銅彝器の編年に直接拠った。第2図の各遺物と似たものが，いつの年代の青銅彝器と墓で共伴しているかを調べ（西周墓には追葬はない），その結果に基づいて，第2図の各遺物の年代を求めた。先行する編年研究のない玉削も，同じ方法で年代を求めた。

なお，第2図の遺物には，3B層から出土したとの説明は，実はいずれについても無い。しかし，後述のように，第2図の遺物の登録番号に，(3B)とある[20]。このことをもって，3B層出土と見做せる。

1，陶　鬲　T44（3B）：1

年代について，簡報で，西周時代早期とする[21]。妥当である。

口唇のところが全く横へふくらまず，縄文が口唇のすぐ下から底まで器表面全体につくのは，西周時代早期とそれ以前の陶鬲の特徴である。

同様の陶鬲は，西周時代早期またはそれ以前の青銅彝器とだけ墓で共伴している。

・陝西省鳳翔県南指揮公社西村80M112[22](Mは墓の略号，以下同じ)
・陝西省岐山県賀家村76QHM113[23]
・陝西省長安県灃西公社83灃毛M1[24]

なお，この陶鬲は，鳳雛甲組建築基址の西廂の，南から七番目の部屋の入口から少し中に入ったところで出土している[25]。

2，陶　鬲　T37（3B）：22

年代について，簡報は，西周時代晩期とする[26]。中期である可能性がある。

頸のところから外側にむかってぐっと広がった口唇部の内面に弦文（断面波形の平行突線文）がつくのは，西周時代には鳳雛一帯と交流が盛んだったにちがいない，河南省洛陽市（西周時代の東の都跡）の北窯村遺跡の調査結果では，晩期のものではなく，中期のものからである[27]。

3，瓷　豆　T44（3B）：22

年代は，西周時代早期であろう。

この瓷豆と形の良く似た瓷豆が，小ぶりであるが，安徽省屯溪の墓1で，西周時代早期の青銅彝器と共伴している[28]。

屯溪の墓1の青銅彝器は，類例の少ない文様

や器形のものが目立ち，年代を求めるのが難しい。しかし，出土した青銅彝器のうちで写真が公表されているものは，1：80と1：81の鼎，1：96の𣪘を除くと，器形は，西周時代早期のそれであることから，墓1の青銅彝器の年代は，西周時代早期の可能性が高い。下っても，中期であろう。また，屯渓墓1出土の瓷尊は殷墟出土の陶尊に器形が良く似る[29]。

4，陶　罐　T37（3B）：4

年代は，西周時代の早期または中期である。

頸から口唇部にかけて，垂直に立ち上がる。胴部の中で最もふくらんだところが，胴部の上と下のほぼ真ん中にある，の二つの特徴は，西周時代早期または中期の陶罐のものである。

同様の陶罐は，西周時代早期の青銅彝器との共伴例が5例あり，西周時代中期の青銅彝器との共伴例が1例ある。

早期の青銅彝器との共伴例

・陝西省岐山県王家嘴 WM1[30]

・陝西省扶風県雲塘M20[31]

・陝西省長安県張家坡M101[32]

・同　　上M178[33]

・同　　上54号墓[34]

雲塘M20のものと，張家坡54号墓のものは，胴部の最もふくらんだところが，真ん中よりもやや上の方にある。

中期の青銅彝器との共伴例

・陝西省扶風県上康村第2号墓[35]

5，瓷　罍　T34（3B）：以下記載なし

年代は，西周時代早期であろう。

文様は異なり，大きさも二まわりくらい小さいが，形の良く似た瓷罍が，3，の瓷豆のところで触れた屯渓墓1で出土している[36]。

なお，この瓷罍は，鳳雛甲組建築基址の西廂の廊で（南から七番目の部屋の入口付近）出土している[37]。

6，瓷　豆　T43（3B）：8

他に良く似た瓷豆が見当らないために，年代は決定できない。

7，瓷　豆　T35（3B）：26

年代は，西周時代早期であろう。

良く似た瓷豆の，西周時代早期の青銅彝器との共伴例が1例ある。

・陝西省岐山県賀家村76QHM113[38]

口唇の3個の瘤が無い点を除けば，この瓷豆と良く似た瓷豆は，西周時代早期の青銅彝器との共伴例が1例，西周時代早期後半または中期の青銅彝器との共伴例が2例ある。

早期の青銅彝器との共伴例

・湖北省黄陂県魯台山M36[39]

早期後半または中期の青銅彝器との共伴例

・陝西省岐山県賀家村6号墓[40]

・陝西省長安県普渡村墓[41]

8，陶　罐　T36（3B）：7

年代について，簡報は，西周時代晩期とする[42]。その根拠は，『灃西発掘報告』で西周時代晩期と編年された陶罐[43]とこの陶罐がそっくりな事実である。

反証をあげることができない。簡報の説に従う。ただ，3A層からの混入の可能性はあろう。「はじめに」の土層説明参照。

9，銅　鏃　T36（3B）：16

年代は，西周時代早期である。

良く似た形の銅鏃が，西周時代早期の墓（伴出している銅戈・銅矛から明か）から出土している。

・陝西省長安県張家坡204号墓[44]

10，玉　削　T37（3B）：10

年代は，殷時代後期の可能性がある。

良く似た大きさ，形の玉削が，殷時代後期初めの有名な殷墟婦好墓で出土している[45]。

なお，この玉削は，1988年7月から8月に岐阜市で開催された中国陝西省宝鶏市周原文物展に出品されていた（展示品番号40－2）。

以上10点の3B層の出土遺物のうち，西周時代の早期およびそれ以前のものと考え得るものは，1・3・4・5・7・9・10の計7点にのぼる。中期と考え得るものは，2，の1点である。晩期と考え得るものは，8，の1点である。6，の瓷豆の年代は求めることができなかった。

この3B層の遺物の年代の検討結果から，鳳雛甲組建築が炎上した年代は，西周時代中期より下ることはない。むしろ，早期である可能性が高いと結論される。

おわりに

陝西省岐山県鳳雛村の甲組建築が炎上した年代について，広く認められている西周時代晩期とする説は誤りで，西周時代の中期あるいは早期と考

えるべきであることを論証した。

論拠となる3B層出土の遺物の年代について，今ひとつつかみ切れずに止まった。これは，西周時代の土器の編年研究の立ち遅れによっている。今後の西周時代の土器の編年研究の進展に期待したい。進展によって，3B層出土遺物の年代を考え直す必要が出てくるかもしれない。

また，3B層の出土遺物のうち，第2図のものは，先述のように，一部である。したがって，未発表の出土遺物の年代によっては，3B層の出土遺物は，どの年代のものが主体であるかが，変わってしまうかもしれない。

ただし，鳳雛甲組建築は，掘立柱式で，しかも木柱を版築の土壁に埋め込んだ方式の構造であることから[46]，建てられたのが，「はじめに」で述べたように殷時代で良いとすると，西周時代晩期まで朽ちることなく建っていたか，大変疑問である。西周時代は，その始まりの年代すなわち殷時代の終わりの年代が，「はじめに」で述べたように紀元前12世紀末－11世紀末頃らしいとはっきりしないのであるが，終わりの年代は紀元前771年とはっきりしていて，約250年間はあったと考えられる[47]。

なお，鳳雛甲組建築の炎上年代を考えるにあたって，「はじめに」で述べた，その基壇で見つかった2基の灰坑から出土した甲骨片の年代は参考にしないのか，との疑問が出されるかもしれない。筆者は，つぎのように考えて，参考にしなかった。

2基の灰坑から出土した甲骨片は，必ずしも，鳳雛甲組建築が炎上した時に，そこにあったとは言えない。したがって，甲骨片の年代を，鳳雛甲組建築が炎上した年代を求める根拠としない方が良い。

2基の灰坑から出土した甲骨片は，炎上時に鳳雛甲組建築にあった可能性はある。大部分が焼けているとの報告が，簡報ではないが，あり[48]，焼けた角製品（一端あるいは両端が尖った細長い円錐台形で，ある種の骨鏃に似るが，長さがおよそ1.3－2.5cmと小さい）が752点伴出しているとの報告が，これも簡報ではないが，ある[49]。

しかし，2基の灰坑が鳳雛甲組建築の基壇に掘られたのは，建築の炎上後である。2基の灰坑は，共に，鳳雛甲組建築の壁を危うくする位置にあった（H11は西廂の南から二番目の部屋の東壁と南壁に接して[50]，H31は同じ部屋の北壁に接している[51]）。鳳雛甲組建築の建設中，あるいは使用中に，建築を危うくするような坑を掘ることは有り得ない。また，灰坑中の甲骨片は，灰褐色土（焼土粒は混じる。上述の3A層に由来するのではないか）と一緒であって[52]，3B層のような焼土とは一緒ではなかった。灰坑中の甲骨片が炎上時に鳳雛甲組建築内にあったとすれば，焼土と伴うはずである。

この論文の骨子は，1986年10月11日に，現在の中国考古学研究会（東京）の前身に当たる会で，「岐山鳳雛西周大型建築址の最期と甲骨出土窖穴の年代」と題して発表した内容の一部である。

〈謝辞〉

資料の収集にあたって，谷豊信氏と西村俊範氏の御好意を頂いた。内容について，林巳奈夫先生と武者章氏並びに中国考古学研究会（東京）の会員の皆さんに御批判頂いた。記して，感謝の意を表す。

註

（1）陝西周原考古隊1979，同1981，中考研澧西発掘隊1981，同1987，鄭洪春1984。
（2）陝西周原考古隊1979。
（3）たとえば中考研1984・250頁，松丸1986・88頁，杉本1986・89頁。
（4）乙組は陳全方1984・8頁，南側のは楊鴻勛1981・23頁。
（5）陝西周原考古隊1979・28頁。
（6）同　　上1979・32頁。
（7）同　　上1979・32頁。
（8）陳全方1982・306頁。
（9）同　上1982・305頁。
（10）同　上1982・305頁。
（11）同　上1982・305頁。
（12）陝西周原考古隊1979・27－28頁。
（13）同　　上1979・34頁。
（14）陳全方1984A・12頁。
（15）陝西周原考古隊1979・34頁，陳全方1984A・12頁。
（16）丁　乙1982・401頁。
（17）白川静1975・324頁の図。
（18）陝西周原考古隊1979・32－33頁，図五－七・二〇－二三，陳全方1984・図一－二。

(19) 陶器は中考研1962・図八六の案が広く参照されている。瓷器の研究状況については，岡村秀典1986・80頁参照。銅鏃は林巳奈夫1972・361－363頁が代表的。
(20) 陝西周原考古隊1979・32－33頁。
(21) 同　　上1979・32頁。
(22) 雍城考古隊1982。
(23) 陝西周原考古隊1983。
(24) 中考研豊鎬発掘隊1984。
(25) 陳全方1984・8頁。
(26) 陝西周原考古隊1979・34頁。
(27) 洛陽博物館1981・53頁。
(28) 安徽省文化局文物工作隊1959・図版二二，2の釉豆。
(29) 中考研1987・図一一九。
(30) 巨万倉1985。
(31) 陝西周原考古隊1980。
(32) 中考研灃西発掘隊1962。
(33) 中考研1962・図版七一。
(34) 中考研灃西発掘隊1980・462頁。
(35) 陝西省文物管理委員会1960。
(36) 安徽省文化局文物工作隊1959・図六，1，図版十八，1。
(37) 陳全方1984・8頁。
(38) 陝西周原考古隊1983。
(39) 黄陂県文化館ほか1982。
(40) 陝西省博物館ほか1976。
(41) 陝西省文物管理委員会1957。
(42) 陝西周原考古隊1979・34頁。
(43) 中考研1962・図版五七，1。
(44) 同　上1962・図版七〇。
(45) 中考研1980・143頁（小刀のⅠ式），図版一一九，1の登記番号479の遺物。
(46) 陝西周原考古隊1979・32頁，本論文の第1図。
(47) 白川静1975・324頁の図。
(48) 尹盛平1981・13頁。
(49) 陳全方1982・307－308頁，379頁の図七。
(50) 陝西周原考古隊1979A・図一。
(51) 陝西周原考古隊ほか1982・図一。
(52) 同　　上1982・10頁，陳全方1982・305－306頁。陝西周原考古隊1979A・38頁の土層説明は理解不能である。

引用文献（著者五十音順）

安徽省文化局文物工作隊1959　「安徽屯溪西周墓発掘報告」『考古学報』1959，4，59－90頁，図版一－一八。
尹盛平1981　「周原西周宮室制度初探」『文物』1981，9，13－17頁。
岡村秀典1986　「呉越以前の青銅器」『古史春秋』3，63－89頁。
巨万倉1985　「陝西岐山王家嘴，衙里西周墓発掘簡報」『文博』1985，5，1－7頁，図版一。
黄陂県文化館・孝感地区博物館・湖北省博物館1982「湖北黄陂魯台山両周遺址與墓葬」『江漢考古』1982，2，37－61頁，図版一－五。
白川静1975　「金文通釈」44　『白鶴美術館誌』44。
杉本憲司1986　『中国古代を掘る』中公新書813。
陝西周原考古隊1979　「陝西岐山鳳雛村西周建築基址発掘簡報」『文物』1979，10，27－37頁。
同　　上1979A　「陝西岐山鳳雛村発現周初甲骨文」『文物』1979，10，38－42頁。
同　　上1980　「扶風雲塘西周墓」『文物』1980，4，39－55頁。
同　　上1981　「扶風召陳西周建築群基址発掘簡報」『文物』1981，3，10－22頁。
同　　上1983　「陝西岐山賀家村西周墓発掘報告」『文物資料叢刊』8，77－94頁。
陝西周原考古隊・周原岐山文管所1982　「岐山鳳雛村両次発現周初甲骨文」『考古與文物』1982，3，10－22頁。
陝西省博物館・陝西省文物管理委員会1976　「陝西省岐山賀家村西周墓葬」『考古』1976，1，31－38頁，図版一－四。
陝西省文物管理委員会1957　「長安普渡村西周墓的発掘」『考古学報』1957，1，75－86頁，図版一－六。
同　　上1960　「陝西岐山，扶風周墓清理記」『考古』1960，8，8－11頁，図版二－三。
中国科学院考古研究所1962　『灃西発掘報告』
中国社会科学院考古研究所1980　『殷虚婦好墓』
同　　上1984　『新中国的考古発現和研究』
同　　上豊鎬発掘隊1984　「長安灃西早周墓葬発掘記略」『考古』1984，9，779－783頁，図版一。

同　　上灃西発掘隊1962
「1960年秋陝西長安張家坡発掘簡報」『考古』1962，1，20－22頁，図版八。
同　　上灃西発掘隊1981
「1976－1978年長安灃西発掘簡報」『考古』1981，1，13－18・76頁。
同　　上灃西発掘隊1987　「陝西長安灃西客省庄西周夯土基址発掘報告」『考古』1987，8，692－700頁，図版五－六。
陳全方1982　「陝西岐山鳳雛村西周甲骨文概論」『古文字研究論文集』(『四川大学学報叢刊』10) 305－380頁。
同　上1984　「周原西周建築基址概述」(上)『文博』1984，1，5－12頁。
同　上1984A　「同　　上」(下)『文博』1984，2，9－14・43頁。
丁　乙1982　「周原的建築遺存和銅器窖蔵」『考古』1982，4，398－401・424頁。
鄭洪春1984　「西周建築基址勘査」『文博』1984，3，1－5・9頁，図版一。
林巳奈夫1972　『中国殷周時代の武器』
松丸道雄1985　『ビジュアル版・世界の歴史』5
楊鴻勛1981　「西周岐邑建築遺址初歩考察」『文物』1981，3，23－33頁。
雍城考古隊1982　「鳳翔南指揮西村周墓的発掘」『考古與文物』1982，4，15－38頁，図版五－八。
洛陽博物館1981　「洛陽北窯村西周遺址1974年度発掘簡報」『文物』1981，7，52－64頁。

挿図出典

第1図　陝西周原考古隊1979の図四。
第2図　同　　上の図五－七を取捨編集合成。